

8. 在宅栄養 (HPN) 症例における離脱の検討

(外科学第三) 長江 逸郎, 木村幸三郎,
小柳 泰久, 小野 充一,
伊藤 伸一, 浦田 義孝

当教室で、現在までに 3 例に対し HPN を施行し前回報告した。その内の 1 例は離脱に成功し、現在さらに 1 例に離脱を検討中である。今回我々は、自験例をもとに HPN 離脱の適応、タイミング等の問題点を加え報告する。

症例 1. 62 歳女性、膀胱癌にて膀胱全摘術および尿管皮膚瘻造設術を施行後、頻回のイレウスにて HPN 施行、施行後 116 日にて離脱に成功した。

症例 2. 53 歳男性、大量消化管出血にて、全結腸切除術および広汎小腸切除術施行後、HPN 施行。現在、施行後 2 年となり、高カロリー輸液を維持液に変更し経過観察中であるが離脱を検討している。

9. 長時間持久運動が血中テストステロンに及ぼす影響の男女差について

(衛生学公衆衛生学)

勝村 俊仁, 高波 嘉一, 垣平 博臣,
下光 輝一, 大谷由美子, 藤枝 賢晴,
坂本 歩, 岩根 久夫, 藤波 襄二

(八王子医療 C 検査科) 中島 英文, 石井 ユリ子

〔目的〕長時間持久運動 (アイアンマントライアスロン, 水深 3.9 km, 自転車 180.2 km, 走行 42.195 km) における血中テストステロンの変化の男女差について検討した。〔対象および方法〕トライアスロンに参加した男性 21 名, 女性 6 名を対象とし、競技前、直後、翌日に採血し、テストステロン (T), 黄体化ホルモン (LH), 副腎皮質刺激ホルモン (ACTH), コルチゾール (CS) について測定した。

〔結果および考察〕①競技直後 LH は男女共に増加, T は男で減少, 女で増加した。LH と T の相関傾向は女のみにもみられ卵巣の T 分泌能は保たれたことが示唆された。② ACTH と CS は直後に増加し, 男女共正の相関傾向がみられ副腎機能は保たれていたことが示唆された。③女で CS と T の間に負の相関傾向がみられ CS による T 分泌の抑制が考えられるが, 男では相関がみられず, また LH と T との相関もないことから精巣の T 分泌能の低下があったものと考えられる。